

高大連携ワーキンググループによる「学びの看護体験」の実践報告

柳原眞知子 板山 稔 古澤弘美 伊藤文子 内山卓秋 中村悦子
長岡崇徳大学

Practical Report of " Nursing Experience of Learning " by the Working Group for
High School-University Collaboration

Machiko Yanagihara, Minoru Itayama, Hiromi Furusawa, Ayako Itou, Takaaki Uchiyama, Etsuko Nakamura
Nagaoka Sutoku University

要旨：本報告は、学内に設置された高大連携ワーキンググループによる高校生対象の「学びの看護体験」の2021年と2022年の活動報告である。

高大連携ワーキンググループは、高校と大学の教育連携についての会議を高大連携推進会議（以下、推進会議）として年間数回開催し、4校（長岡大手高等学校・長岡向陵高等学校・三条東高等学校・帝京高等学校）の高校教諭と意見交換を重ねてきた。推進会議で討議された内容を基に「学びの看護体験」のプログラムが作成され、夏休み期間を利用した体験学習を実施するに至った。プログラムはグループワークによる学習や科学的根拠に基づいた看護ケアの体験を含み、領域を超えた学内教員の協力により実施された。終了後には参加者の高校生や引率の高校教諭から満足度の高い感想が聞かれ、大学の学びを高校生に体験してもらおうというアカデミック・インターンシップや、高校と大学の学びをつなぐ教育連携の可能性が示唆された。

キーワード：高大連携，学びの看護体験，アクティブラーニング，実践報告

Keywords : high school-university collaboration, nursing experience of learning,
active learning, practical report

1. はじめに

「学びの看護体験」は、令和2年「看護大学における高大連携の在り方を考える会（以下考える会とする）」に端を発し、同年考える会は新潟県大学魅力向上支援事業の委託を受けた。考える会の活動は、高等学校教諭代表による「看護大学との高大連携をどう進めるか」と大学教員代表による「高校と大学の接続教育—看護大学モデルの1案」の提言を基に活動が具体化された。その後、名称を「看護大学における高大連携の在り方を考える会」から「高大連携推進会議」に変更した。高大連携推進会議の主旨に賛同頂いた4校の高校教諭と意見交換を重ね、「学びの看護体験」として年3回、夏休みに高校生への体験学習を実施するに至った。この看

護体験の特徴は、単なる看護技術の模倣に終わるのではなく、看護大学の教育や研究、キャンパスライフの体験を通し、「看護について考え、看護を学ぶ面白さ」を知ってもらうことを目的とした。

人々の命を守り、人々の健康な生活を支える看護者に求められる能力とは、高い知識や技術、倫理観、そして看護を科学的に理論的に捉えた看護実践力である。看護者の芽は、進路選択の岐路に立つ高校生の職業観に始まっていると言える。「学びの看護体験」は、看護の道へ進もうとする高校生に、看護を大学で学ぶことの意義を知る機会の場合として出発した。

2. 「学びの看護体験」の目的

「学びの看護体験」を通して、安全・安楽な

連絡先：〒940-2135 新潟県長岡市深沢町2278番地8
E-mail: yanagihara-m@sutoku-u.ac.jp
TEL: 0258-46-6666 (内6605) FAX: 0258-86-6637

看護とは科学的な根拠（エビデンス）に基づいて提供されていることを、高校生に体感してもらい、大学で看護教育を受ける意義や面白さを知ってもらおう機会とすることである。

3. 「学びの看護体験」の実際

1) 令和3年度の実践報告

令和3年度は3回実施された。実施日は7月28日（水）、7月31日（土）、8月5日（木）である。コロナ禍で病院見学が中止され長岡大手高等学校や新潟西高等学校からの依頼と自由参加の日を設けての実施であった。内容は表1に示したとおりである。テーマの設定は、高校側から生徒にチーム医療について理解を深めさせたいという要望があり、調整の上「チーム医療」というテーマを取り上げることとなった。実施方法はグループワークにより、それぞれ討議された内容の発表がなされた。参加校と人数は表2に示したとおりである。団体申し込みが長岡大手高等学校と新潟西高等学校の2校であり、その他、自由参加としては様々な地域の高校からの参加が見られた（表2）。

表1 令和3年度のプログラムスケジュール

10:00～10:30	受付・白衣の着替え オリエンテーション・交流（無言であなたのお誕生日はいつ？）	
10:30～12:00	グループでチーム医療を考えてみよう！ グループワーク	
12:00～12:40	昼食休憩	
12:40～13:40	母性看護学 ご安産一座による「リアル出産体験“ロールプレイ”	成人看護学 病气やけがの人のからだを楽に安全に動かす援助
13:40～14:40	成人看護学 病气やけがの人のからだを楽に安全に動かす援助	母性看護学 ご安産一座による「リアル出産体験“ロールプレイ”
14:50～15:20	学びの振り返り（高校生参加者全員による感想発表） 着替え、解散	

表2 令和3年度の参加校と人数

高校名	人数	高校名	人数
長岡大手高等学校 (団体申込)	17	高田高等学校	2
新潟西高等学校 (団体申込)	13	関根学園高等学校	2
五泉高等学校	5	村上中等教育学校	2
万代高等学校	5	有恒高等学校	1
新潟江南高等学校	5	上越高等学校	1
新潟中央高等学校	5	塩沢商工高等学校	1
柏崎翔洋中等教育 学校	4	長岡高等学校	1
小千谷高等学校	4	新発田中央高等学校	1
新発田高等学校	3	十日町高等学校	1
長岡向陵高等学校	2	新井高等学校	1

授業概要

令和3年度は、高校からの要望によりチーム医療をテーマとした授業を展開し、看護体験は成人看護学、母性看護学の領域からの授業提供となった。

(1) 「グループでチーム医療を考えてみよう！」

在宅・公衆衛生看護学教員の古澤が実施した。病院のチーム医療について理解してもらうことを目的に、病院で働く医療専門職が、事例に対してどのような役割を發揮するのかグループワークを行い、模造紙に役割を書き込み、発表した。授業スケジュールは表3に示した。グループワークの事例は、脳梗塞で入院した高齢男性患者で、右麻痺があり、日常生活動作がうまくできず、退院に向けて不安を持っている状況とした。事前学習として、「病院で働く医療の専門職について、どのような職種があり、どのような仕事をしているのか」について調べ、提出した。

高校生は入院中の患者の療養状況について十分な知識がない状況であったが、グループワークを通して、事例に対して多くの医療の専門職がチームでかわり、それぞれの専門性を發揮していることを感じ取っていた。

表3 「グループでチーム医療を考えてみよう！」の内容とタイムテーブル

時間	内容	備考
15分	グループ分け、グループワークの説明、事例・疾患・ケアの説明、用紙の使用使用方法説明	
50分	グループワーク実施 参加者が事例の問題解決に必要な医療者を選び、その理由をグループ内で話し合う。 グループとしてどのような医療職が必要なのか結論を紙に書く テーマ：患者さんが安心して退院できるように「医療職者の関わり」	名札、 職種カードの準備（具体的な役割を記入したもの） 患者さん紹介用の資料準備 発表用用紙、マーカー準備
10分	グループごとに発表 1グループ2分	
10分	チーム医療についてのまとめ講義	

(2) 「病气やけがの人のからだを楽に安全に動かす援助」成人看護学

成人看護学教員の広井が実施した。モデル人形を使って病气やけがの人のからだを楽に安全に動かす援助を体験し、ボディメカニクスを考えることを目的とした。「ボディメカニクス」は骨格・筋肉・内臓などを中心とした身体のメカニズム（身体力学）を活用する技術である。この方法で行うことにより、看護師の負担を軽減し、患者の安全安楽につながる動作ができる。看護師は、病气やけがなどによって自分でからだを動かすことができない患者のケアを行う。

「病气やけがの人のからだを楽に安全に動かす援助」というテーマで講義と演習を行った。教材モデルを使って体験し、患者役も高校生に担ってもらった。小柄な体格の生徒もいたが、「あれっ、力をいれなくてもできた」「楽に体を起こしてもらった、患者さんは楽ですね」などの感想があった。実際に行うことで、患者さんの気持ちにもなれたようだった。看護師役をする人の患者役の人にかける優しい言葉やまなざしがとても素敵だった。

(3) 「リアル出産体験」母性看護学

このテーマでの看護体験に向けて「ご安産一座」を結成し、準備をした。アクターは母性看護学教員高島・佐藤（助産師役）、柳原（ナレーター・小道具）、小児看護学教員伊藤（産婦役）の4名で実施した。この体験学習の目的は、第1にロールプレイにより体験する機会がない出産場面を再現し、新たな学びを作り出すこと、第2に仮想出産であっても女性の出産時の大変さを知り生命誕生の重さを理解すること、第3はさまざまな医療従事者のサポートを理解することである。

演習内容は、LDR室で陣痛が始まった産婦が経過と共に陣痛間隔が短くなり、痛みを強く訴え、助産師が痛みの軽減のケアをし、いよいよ児の誕生が近くなり分娩介助を行い、産声を上げて赤ちゃんが生まれ、生まれた赤ちゃんを母親が抱きとめるという展開であった。

この体験に参加した高校生からは、「助産師になりたい」「生命の重みを改めて感じた」「自分の誕生に感謝」など様々な感想があった。このことから体験学習の目的はほぼ達成されたようだ。しかし、初めてのご安産一座の舞台上で赤ちゃんの産声を出すのが少し遅れ、産婦役は疲労困憊するなど、対応に慌てるロールプレイであった。

2) 令和4年度の実践報告

令和4年度の団体申し込みは、長岡大手高等学校と万代高等学校、三条東高等学校で3回実施された。自由参加の日は、スケジュール上難しいため実施されなかった。実施内容のスケジュールは表4と表5に示した。表4は万代高等学校のニーズを取り入れた新たな形となった。スケジュールは7月28日（木）、7月30日（土）、8月5日（金）の3回である。7月28日（木）は万代高等学校12名、7月30日（土）は長岡大手高等学校15名、高田高等学校2名であり、8月5日（金）は三条東高等学校21

名であった。

表4 令和4年度のプログラムスケジュール（万代高等学校）

10:00～10:30	受付 アイスブレイク
10:30～12:00	体験1 チーム医療 グループワーク
12:00～12:40	昼食休憩
12:40～13:25	体験2・「高校と大学の学びの違い」 プレゼン、グループ発表 ・本学学生による大学施設案内
13:25～14:00	体験3 国家試験体験
14:00～14:30	学びの振り返り（高校生参加者全員による感想発表）

表5 令和4年度のプログラムスケジュール
（長岡大手高等学校・高田高等学校・
三条東高等学校）

9:30～10:30	受付・白衣の着替え アイスブレイク	
10:30～11:50	体験1 『グループでチーム医療を 考えてみよう！』 グループワーク	
11:50～12:40	昼食休憩	
12:40～13:30	母性看護学 「人が生まれて初 めて口にする栄 養」	老年看護学 「高齢者とのコ ミュニケーション」
13:40～14:30	老年看護学 「高齢者とのコ ミュニケーショ ン」	母性看護学 「人が生まれて初 めて口にする栄 養」
14:30～15:00	学びの振り返り（高校生参加者全員による感想発表）	

授業概要

令和4年度も、高校からの要望によりチーム医療をテーマに授業展開し、看護体験は老年看護学、母性看護学の領域からの授業提供となった。

- (1) 「グループでチーム医療を考えてみよう！」

在宅・公衆衛生看護学教員の古澤が実施した。授業の実施方法については、令和3年度と同様に実施した。高齢脳梗塞患者の退院に向けて、医療の専門職がどのようにかわるか、グループワークを行った。令和3年度と同様、事前学習を行って参加してもらったが、一人の患者に対して多くの医療の専門職が

チームでかかわっていること、看護職が重要な要になることなどを学んでいた。

- (2) 「高齢者とのコミュニケーション」老年看護学

老年看護学教員の袖山・青柳・角山・多田・菅沼が担当した。日本は、超高齢社会となり、高齢者人口が全国民の29.1%（2022年9月15日現在）を占めるが、三世代世帯の減少（1992年36.6%、2019年9.4%）により、若者の高齢者との触れ合いは少なくなってきており、ジェネレーションギャップを双方で感じていると思われる。今回「高齢者とのコミュニケーション」をテーマに、講義を活かして事例の設問に回答できる、高齢者とのコミュニケーションで配慮することが表現できることを目標とした。

授業構成は、「コミュニケーションの基本」「聴覚・視覚機能の加齢変化とコミュニケーション」「退院後の食事を家族に依頼することをためらっている透析患者の高齢者と看護学生の会話の事例」「コミュニケーションに影響する聴覚・視覚の老化の疑似体験」とした。

看護学生のコミュニケーション技術に課題のある事例は、教員がロールプレイをして回答してもらった。感想では「看護学生が高齢者に共感している部分が少ないと感じた」と課題を捉え、高齢者が看護学生に「ゆでただけのもやしを食べたことがあるか」に対して、「ゆでたままだと慣れるのに大変ですよ」と気持ちに寄り添った回答があり、高校生の感性の豊かさを感じた。

視覚・聴覚の疑似体験では、ゴーグル、ヘッドホンを付け、口頭で示した色紙の選定、おりがみの折り方に戸惑っていたが、完成すると嬉しそうにしていた。「老眼を一つのものとして捉えていたが様々な変化があると初めて知って驚きました」と単なる視力低下だけではなく、光覚・視野・色覚などの変化も感

じたものと思われた。

全体の感想では、「高齢者に配慮した対応をしていきたい」「高齢者が社会の一員として尊重され、安心して生活できる社会にしたい」「祖母に伝わらないことがあったので工夫をすると良い点があったので次から心がけてみようと思う」とあった。今回の学びの看護体験の高校生の反応から、学校教育の中で身近に高齢者を感じられる機会をもつ必要性について考えさせられた。

(3) 「人が生まれて初めて口にする栄養～母乳育児のメカニズム～」母性看護学

母性看護学教員の柳原と佐藤で実施した。この体験学習の目的は、人類が生まれてはじめて口にする母乳栄養の意義と授乳行動を理解することである。

演習内容は、最初講義で、人間も哺乳動物：哺乳動物とは、母乳の準備はいつからはじまるのか、母乳の成分は変化するのかをプレゼンした。次に事前課題の「母乳と人工栄養はどこが違う」のレポート発表を参加高校生に行なってもらった。デモンストレーションとして人形を用いて、母乳の飲ませ方を行ない、最後に乳房模型を用いて実際に乳汁を圧出する体験をした。

この体験に参加した高校生は、「授乳の方法までは知らなかったことなので、学べて楽しかった」「赤ちゃんを抱っこさせていただきとても愛おしく思った」「母乳と人工ミルクの違いを知った」「普段できない体験ができた」「体験のプログラムがすごく勉強になった」などの感想を発表していた。「授乳する時に赤ちゃんを抱く作法があることを知った」との発言から、授乳に関する理解を深められ、母乳育児への関心を高められた様であった。また、さまざまな体験の組み立てにより興味を引き、面白さを感じたようであった。

4. 「学びの看護体験」の評価

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、病院で行われていた一日看護体験が中止され、高校生にとっては看護師の仕事の間近で見学し、看護の体験を通して進路を検討する機会が失われた。令和3年度からは一日看護体験を実施する病院も一部にはあったが、受け入れ人数に関してはコロナ禍以前より制限している病院が多かった。そのような状況の中で、本学の学びの看護体験は、病院での一日看護体験の代替として高校からのニーズによりスタートした経緯があった。しかし、大学で行う看護体験は、病院で看護を実践している看護師の姿を通した看護体験とは異なり、臨床現場のような看護実践の追体験は実施できない。そのため、本学で実施する看護体験は、看護を大学で学ぶことを体験するという「学びの看護体験」であることを主軸に置いた。これは病院で実施される一日看護体験との大きな差異であり、特長ともいえる。以下、プログラム内容と効果、および高大連携としての「学びの看護体験」の意義の2つの観点から述べる。

プログラムに関しては、まず多職種チーム医療についてディスカッションを行うグループワークを設けていることに特色がある。このグループワークは、模擬患者の事例の退院支援を題材にして、チーム医療を受講生のチーム（グループ）で検討するという内容になっている。グループメンバーは複数の高校の生徒で編成されることもあり、初めて顔を合わせる者同士でディスカッションをすることは、高校生にとっては緊張を伴う状況でもある。しかし、プログラムを通して事前学習をもとに自らの意見を述べることで、他者の意見に耳を傾けること、自己と他者の考えの共通性と相違を理解し合うことを体験していた。このような体験を通し、患者の思いに寄り添うことの大切さと、そのために必要な多職種間の情報共有やコミュニケーションの重要性を理解することができていた。また、成人・母性・老年といった専門分野の

看護体験では、単に看護技術の実施体験に終わらず、科学的根拠の解説とそれに基づいた看護技術の体験をプログラム内容に組みこんだ。このことにより、看護は「対象者の思いの尊重」と「科学的根拠に基づいた看護」という2つの側面から双方向的に追究することが重要であることを体験できたと考える。

次に高大連携としての意義であるが、これには大学の学びを高校生に体験してもらうというアカデミック・インターンシップの側面や、高校の学びと大学の学びをつなぐ教育の高大接続の意味がある。本学は看護学部看護学科の単科大学であることから、成人・母性・老年などの看護の専門分野についての学びをプログラムの素材にはしているが、俯瞰的な観点で見れば、大学で学ぶことより深い探究心を刺激している。さらに「学びの看護体験」の企画・運営を通して高校教員と連携・協働することは、広い視野と多面的な視点による分析力や疑問を主体的に追究する探求力の涵養について、高大を接続させて相互的に検討する機会をもつことにつながっていると考える。

5. 高大連携ワーキングの評価と今後の展望

文部科学省は「高等学校と大学との接続における1人1人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について」の中で、高大連携について「生徒の能力・意欲に応じた教育の実現を目指していくためには、『高等学校教育』あるいは『大学教育』のいずれか一面のみから論

ずるべきではない。高等学校・大学の双方が、後期中等教育機関・高等教育機関としてそれぞれ独自の目的や役割を有していることを踏まえつつ、高等学校と大学との接続を柔軟に捉え、生徒一人一人の能力を伸ばすための、高等学校・大学双方が連携した教育の在り方を、以下検討していく」と論じている。地域における高校と大学との連携が求められている。

さらに文科省はアクティブラーニングの導入を小中高に勧めてきた。魅力的な授業を展開するには、教育方法の開発が求められる。高校と協働して教育方法や教育システムの改善などが課題となる。地域のニーズに応え大学の未来を切り開く先駆的モデルケースとして事業を提供することを、高大連携ワーキングの使命と考えている。

「学びの看護体験」では年間60名前後の高校生を集め、高校教員からも病院での看護体験とは違う学びができたとのこと意見をいただいた。今後においても、看護の魅力を、看護大学で学ぶことの意義を、高校側と連携しながら進めていきたい。

引用文献

文部科学省（2022年12月1日閲覧）。「3. 高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について」。 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/06040408/001/004.htm